紅蓮の鬼ノ参　白い花

あんのーん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
紅蓮の鬼ノ参　白い花

【Ｎコード】
Ｎ８４９１Ｔ

【作者名】
あんのーん

【あらすじ】
天津と隣国との国境、天河村に現れた少年、葉蔵。傷つき、記憶を失った葉蔵は、姉を名乗る柚との生活に安らぎを得るが、やがてその背後に謎の男達が蠢き出す。その頃天津では、幸隆が兄、幸政との確執を深めつつあった――　４部構成予定の第３部です。性的表現、拷問等の残酷的描写によりＲ１５。※ｂｌｏｇにて同時掲載中

これまでのあらすじと登場人物紹介（前書き）

予定より遅れること半年（ ∀｀ ；）、ようやく始めることができました。
これまで以上にカメの歩みとなりそうですが、じりじりと進めていきたい所存です。
どうぞ応援をよろしくお願い致します。
本編は４部予定の長編シリーズの第三部です。以下にこれまでのあらすじは用意しておりますが、よろしければ先に１部，２部をお読みいただければ幸甚です。

これまでのあらすじと登場人物紹介

＋＋これまでのあらすじ＋＋

戦国時代初期。雨宮家の隠し里、黒髪村に住む素破の少年於仁丸には篝という美しい恋人があり、これを舐めるように愛おしんでいた。主家雨宮家では娘の鴇姫の婚礼が決まった。相手は隣国領主天津幸政の弟幸隆である。

天津家に争乱の兆しを見た鴇姫の父知徳は、娘に従者として下人戌郎をつける。

婚儀の前に戌郎と共に黒髪村を訪れた鴇姫は篝と於仁丸に会い、ふたりに好感を抱くが、間もなく篝は、偶然行き合った天津幸政とその家臣に惨殺されてしまう。

鴇姫の婚礼当夜、篝の毒によって家臣が死に、幸政も死にかけて幸隆に嫌疑がかけられる。

鴇姫は黒髪村衆を頼り、村衆は篝を殺した者を知る。そして於仁丸も。

於仁丸は復讐を誓い、村を出奔する。（壱／於仁丸出奔）

篝の死と於仁丸の心中を知り、動揺する鴇姫。戌郎は赤犬のギン、そして隼の三郎を鴇姫の身近に配し、姫の気晴らしと安全に心を砕く。

幸政の弟幸隆をも仇と定め、復讐の機会を狙う於仁丸は、これを守ろうとする黒髪村衆を殺し、対立の意志を鮮明にする。

幸隆を厭う天津領主幸政は一方で美しい鴇姫を見初め、これを手に入れようと画策するが於仁丸に阻まれる。この時かけつけた戌郎は、於仁丸により利き腕を落とされる。

先の一件により幸政の拷問を受ける戌郎。己れの無力さを痛感した戌郎は遑（いとま）を願い出る。鴇姫は、これを優しく許した。

幸政の手に落ちそうになった於仁丸はからくも虎口を脱するが、この直後、謎の一団に襲われ力尽きて崖に飛び込み、行方知れずとなる。（弐／復讐鬼）

＋＋これまでの登場人物＋＋
（年齢は二部開始時のものです）

於仁丸…
本編の主人公。１５－６才。篝の恋人。隠し里・黒髪村の糸術の遣い手。
篝とのつきあいから、毒や薬草にも詳しい。
年少者にありがちな生意気な自信家だが、心は優しい。いささか短気。
しかし篝を殺されたことにより、性格が一変。
天津幸政を仇と定め、弟幸隆にも敵意を抱く。（一部／二部）

篝…
於仁丸の恋人。於仁丸の２－３才下。非常に可憐な少女。
閨房での毒殺を目的に毒を以て育てられ、体液に強い毒を持つ。
偶然行きあった天津家当主・幸政とその家臣に陵辱の上惨殺される。
（一部）

戌郎…
鴇姫の下男兼守護者。鴇姫の１－２才上。唖。手話にて会話が可能。
獣や鳥を使役する、声なき声「谺」の遣い手。
幼い頃からつき従ってきた鴇を強く慕っており、鴇からも厚く信

頼されている。
黒髪村の一員で、於仁丸とはごく親しい間柄だったが、
これに利き腕を落とされる。（一部／二部）

鴇…
黒髪村の主家・雨宮家の姫。１６－７才。天津家の次男・幸隆へ戌郎を伴って嫁ぐ。
美しく優しい。いささか頼りなげなところがあるが芯は強い。
幸隆を強く慕っており、戌郎にも身内のような親愛の情と全幅の信頼を
抱いている。（一部／二部）

天津（佐々）幸隆…
天津家の次男。鴇姫より３－４才上。隻眼跛行の異形だが、聡明英知の人。
物語の初期に天津家外戚、佐々家の名跡を継いで兄幸政の家臣となる。（一部／二部）

佐々兼嗣…
幸隆の義父。天津の先代に仕えた老臣。
穏やかな人柄で、兄幸政との間に軋轢のある幸隆を気遣っていたが、
泉下の人となった。（一部／二部）

生田真信…
兼嗣の扈従（こじゅう）。幸隆の２－３才下。
兼嗣が鬼籍に入ってからは、幸隆に仕えている。
見目は涼しく、聡明実直な人柄で、佐々家の面々に信頼されている。（二部）

島田一正・一臣…
天津家の旧臣。親子。父一正は兼嗣の友人で、親子共に幸隆を気遣っている。
（一部／二部）

雨宮知徳…
雨宮領主。鴇の父。剛胆にして知略の人。（一部）

天津幸政…
天津家の嫡男・当主。好色で残忍。幸隆を疎んじている。（一部／二部）

※黒髪村衆…
山中深く、平生は百姓として暮らしている雨宮家の素破衆。
他の人々と関わりを持たぬ暮らしゆえ血が濃く、不具者も多く生まれる模様。
古くから雨宮家に仕えているようだが、
どういった経緯で雨宮家と関わりを持ったかは不明。

※村上家…
天津領の元々の領主。古くはこの地方の守護だった。
天津に領袖忠興を討たれ、因州へと敗退した。

※久間田勝重…
天津の隣国領主。村上氏の縁者であり、天津に遺恨を抱いている。

01

「あっ……、は……っ」
途切れ途切れの、呻吟とも嬌声ともつかぬ声が小屋に満ちている。
筵の上で若い男が組み敷いているのは、男よりはもう少し若い娘であった。大柄な身体には不釣合いなほどに白い肌は肌理も細かく、上気し、薄紅に染まっている。
「おまえもほんまに変わっとるな……。見ず知らずの行き倒れを助けるために、こないなこともするのか」
男がそう言うと、娘は目を開け、焦点の定まらぬ目で傍らを見やった。
「そやかて……」
と、うつけたような声が応える。
「おれが行き倒れを助けたら……、そしたら葉蔵かて……。行き倒れても、誰かに助けて貰えるやろ……」
囲炉裏の向こう、娘の視線の先には、これよりもなお若い男の姿があった。
まだ少年とも呼ぶべき年頃の男である。同じく筵に寝かされたこれは額に汗を滲ませ、固く目を閉じ荒い息をついていた。
「まあええ……。わしかて人でなしとは違うからな。あれが助かるかどうかはわからんが、できる限りのことはしたろうやないか……」
男はなぜか奇妙に表情を歪めるとそう言い、再び激しく娘を揺さぶりはじめた。

男が去った後。
娘はしばらく体を投げ出したままぼんやりとしていたが、やがて汗が浮いたままの肌に垢じみた単衣を羽織ると、奥に寝かせた若い男を覗き込んだ。しばらく痛ましげにその顔を見つめていたが、や

がて額に浮かんだ汗を袂でそっとぬぐってやると、娘は欠けた碗に汲んだ薬湯を少しずつ男の口に流し入れた。

娘の住むあばら家は村はずれにあった。雑木林を抜けた、川べりの僅かな土地にへばりついた掘っ立て小屋。崩れかけ、穴のあいた壁には藁が突っ込まれ、土間には敷き伸べられた筵の他、雑多な器や籠が片隅に転がっている。それらのいずれもが欠け、あるいは色褪せて毛羽立った、粗末なものであった。

この若い男を見つけたのは三日前。ひどい嵐の後で、娘は何か拾いものでもないかと出かけたのだが、見つけたのはこの行き倒れだったという次第である。これは程近くの河原で、茂った葦に隠れるように乗り上げた小船の中に倒れていた。

ずたずたに切り裂かれた野良着は雨に洗われてなお血痕をとどめ、その体はすっかり冷たくなっていた。最初は死人かと腰を抜かしそうになったが、よくよく確かめると息がまだあり、娘はこれを引きずるようにして塒(ねぐら)へと連れ帰ったのである。

筵の上で着物を脱がせ、改めて見た男の傷の様子はひどいものであった。娘はいまやボロ同然の行き倒れの着物を裂き、包帯代わりにそれの全身に巻きつけた。膾のように刻まれた刀傷を見ているとなぜか涙が滲んできたが、薬も何も持たぬ身ではそれ以上になすすべもない……。冷えきった体は、おのれの肌で一晩中温めてやった。

先の男がたまさか訪ねてきたのはその翌朝である。これは甚助といい、村の顔役の倅であったので、娘はいくばくかの薬草や食べ物をねだり、この男に身を任せた。男の先の物言いはこれが故であった。

助かるか否かは五分と五分……それは娘にもわかっていた。

そうしてまた五日ほど経った後、いつものようにやって来た甚助は、戸口代わりの筵を潜ろうとしたとき、見慣れぬ若い男が塞ぐようにしてそこに立っているのに気がついた。

「お……」

甚助は一瞬のけぞるようになり間抜けた声を上げたが、すぐにそ

れが行き倒れと気づき、愛想よく
「何や……ちょっとの間に、えろう元気になったもんやな。どないや、具合は」
と声をかけた。
「おかげさんでもう大丈夫や」
言葉は如才ないが、無愛想な声音である。長く寝ついていたせいか、ひどく乱れたままの長い髪を束ねもせず、俯いた額に落ちかかる前髪を透かすようにして甚助を見たその目の色も、ひどく剣呑なものであった。
「そやからもう、わざわざ来て貰わんでもええからな」
甚助は眉をひそめ、一瞬怯えと不快さを露わにしたが、すぐに気を取り直したか、再び笑顔を作った。
「それは何よりや。そやかてまだ、治りきってはおらんやろう？柚(ゆう)はどないした？」
「おらん。娘に用事なら、出直して来てくれ」
「……」
にべもない口ぶりに、今度こそ甚助も黙った。甚助はそのまま踵を返すと、来た道を戻りはじめた。
「甚助やないか……？　どないしたのや、こんなとこで。うちに寄ってくれたのか……？」
林の中で馴染んだ声に呼び止められ、振り返った甚助はいきなり噛みつくように言った。
「何やあれは？　けったくその悪い」
「え……」
対する娘――柚は甚助の怒りの理由がわからず、呆けたような表情になった。
「あの死に損ないや。あやつ、命の恩人に向こうて『もう来るな』やと……」
「……あれが……？　目が覚めとったのか……？」
「　目が覚めとるどころか、戸口でわしを塞ぐようにして睨みつけ

てきおったぞ」
「ご……ごめん、甚助」
柚は慌てて言った。
「あれは今まで正気がなかったから、おまえが助けてくれたことにも気づいとらんのや。おれがよう言うとくから、気い悪うせんといて、な？」
「……」
「ほんまに何くれとありがと。あれが死なずにすんだんも、みんなおまえのおかげや。ほんまにありがとう思うてる……ちゃんと、よう言うとくから……」
とりなすようにそう言いながら、柚はどこか急いているように見えた。
「……まあ、別に、礼などええが……」
柚に何度も頭を下げながらそう言われ、もごもごと甚助も応えた。
「ほんまにごめんな……！　堪忍したってな」
最後にもう一度頭を下げそう言うと、柚は小屋へと急いだ。

小屋では男がぼんやりと土間に座り込んでいた。
「何をしとるのや！　まだ寝とらなあかんやないか……！」
言いながら近づき、その顔を覗き込む。眉を寄せ、額にはびっしりと脂汗が浮いている。
男が柚を見た。
「誰や、おまえは……ここはどこや」
男の表情は固く、気怠げな、かすれた声にも険がある。だが柚は気遣うように優しい表情を作り、答えた。
「おれは柚や。おまえは七日ほども前に、この先で行き倒れとったのやで。ここはおれの家や……」
言いながら柚は男に手を差しのべ、横になるのを手助けた。男はこれを振り払ったりはせずおとなしく従ったが、どこぞかが痛むのか、動くたびにかすかに表情を歪めた。

「さっきのは誰や……」
筵に横になったあと、再び男が訊ねた。
「あれは甚助というて、村の者(もん)や。おまえを助けてくれたのや」
「……」
男は今度は応えず目を閉じた。眉根を寄せ荒い息をつき、口をきくのも億劫な様子である。
柚はふう……っ、と、小さく息をつくと、
「粥でも作ったろう。甚助が何くれと持ってきてくれたからな」
と言った。眼差しはその声と同じく、温かかった。
囲炉裏で温めた粥を少しずつくくませてやりながら、柚が訊ねた。
「おまえ、名前は？　どっから来たのや？」
途端に、男の表情が頼りなく揺らいだ。だが手元に集中していた柚は気づかなかったようだ。
「えらい大怪我をしとったが……北の方で戦があったと聞いたが、おまえ、もしかして戦場から逃げてきたのか……？」
「……わしは……」
短くない時間の後、男はうめくように言った。
「わからん……何も……」
「……」
柚は手を休め、まじまじと怪我人を見つめた。

02

柚が行き倒れを拾って半月ほどが過ぎた。
当初は命も危ぶまれた男の傷は順調に癒え、柚に対する警戒心もいつしか薄れたようで、この頃には男も時折気安い笑顔を見せるようになっていた。
柚は男よりは二三は年上だろうか。大柄なたくましい体つきだったが、よく見れば愛くるしい顔立ちで、大きな黒目がちの目が印象的な女であった。柚が男を好ましく思ったと同様、男も柚には好感を抱いたものらしい。拾った当座からきれいな顔立ちだとは思っていたが、険が取れたその笑顔には、柚の心もざわめくほどだった。

すっかり男が元気になったある日、これの前に、柚はいくつかの品を並べた。ぼろに包まれた小さな壺や巾着の類である。
「おまえのものやろ」
と柚が言った。
「わしの……？」
「船の中にお前と一緒にあったのや。おまえのもので間違いないわ」
中を見てみろ、という柚の言葉に促され、男はそれぞれの包を解き、壺の蓋を開けた。
ぼろと油紙に包まれた壺の中身は何やら甘い匂いのする油、包みにはこれもまたしっかりと油紙に包んだいくつかの蛤の容れ物、小さな梳き櫛や黒い糸が入っていた。
「……なんやこれ……」
男は面食らったように呟いた。そこらの男の持ち物にしては、奇異な品々ではあった。
「それから、これ」
と、柚が短刀を差し出した。

柄を葛で巻いた山刀である。鞘を払うと、現れた刀身もまた、そこらでは見かけぬ諸刃であった。よく鍛えられた鋼の鈍い光が、柚の目にも入った。
男はしばらくその刀に見入っていたが、やがてかすかに息を吐くとそれを再び鞘に納めた。
「これも……」
続けて押しやってきたものを見れば、いくつかの指貫のようなものである。よく見ると、そこには先の黒糸と思しきものが巻き取ってあった。
「これは……？」
「みんなおまえのや。その指貫はおまえの指に嵌っとった。それが何かは、おれにはわからん……」
「……」
男は指貫をひとつ取り上げまじまじと見つめたが、それが何かを思い出すことは、やはりできなかったらしい。男は再びため息をついた。
「きっと大事なもんなんやろ……。持っとけ」
柚はそう言い、いっそうそれを男へと押しやった。それから
「相変わらず自分のことも思い出せんのか……？」
と訊ねた。
男は苦く笑った。どこか自分に呆れている風情であった。
「……そやけど、名前もないでは不便やろ……」
柚が遠慮がちに続けた。
「何でも、好きなように呼んでくれたらええ」
男が奇妙な笑顔のまま答えると、柚が上目遣いに言った。
「そんなら、葉蔵でええか……？」
男が顔を上げ、笑った。今度はさっぱりとした笑顔であった。何も聞かず、
「葉蔵か。わかった」
と答えた。

その翌日。所用を済ませた柚が小屋へと帰ると、何やらぼろ屋が違って見えた。
一体どうしたのか――と目を見張ったが、理由はすぐに知れた。
穴が開いたままの壁や、崩れかけた屋根が小奇麗に修繕されていた。崩れかけの掘っ立て小屋に、赤の他人が頼まれもしないのに手をかけるはずもない。
「葉蔵」
と、柚は内を覗いて声をかけた。が、姿がない。
裏手に廻ると、葉蔵はそこにいた。
足元に咲くのは数輪の白い花。その中にぼんやりと突っ立っていた。

葉蔵は、小屋の裏手に白い花があることは知っていた。
動けるようになった頃、この花の蕾をすでに目にしていた。だが、今これが咲いているのを見た時、なんとも言えない感情が心に湧いてきたのだ。
「……」
葉蔵は顔をしかめた。この花のことは知っている。死人の血を吸って咲く花だ――だが、この花の色は――。
「葉蔵」
と、柚が声をかけた。葉蔵は振り返った。
「きれいな花やろ。これは天上に咲く花やそうや」
「天上……？　死人花と違うのか」
「真っ白やろ。これはあれとは違う、ありがたい花なんやで……」
恍惚とした表情すら浮かべて柚はそう言いかけたが、何かに気付いたような表情になると、口早に続けた。
「おまえ、これには触らなんだろうな。これには毒があるんや」
「天上に咲く花が毒の花か？」
皮肉っぽく笑いながら葉蔵が応えたが、柚は存外に真面目な顔つ

きで、
「この世は苦界やからな」
と言い、小さく続けた。
「そう、父親が言うとった……」
「……」
「ようけ咲いとるところを知っとる。見に行くか？」
気を取り直したように、明るい声で柚が言った。
「村の者（もん）も、この花のことは嫌うて近づかん。おれだけの大事な場所や」
正直なところ葉蔵も好きでもない――むしろ厭わしいその花の群生を見たいわけもなかったが、せっかく柚が「自分だけの場所」を教えてくれるというので頷いた。

柚が案内した場所は山腹の日だまりであった。湧き水でもあるのだろうか、辺りは湿地になっているらしい。
一面の白い花が、目に眩しく、まばゆく光っていた。なるほど天上はかくや……と、葉蔵ですら考えてしまうほど、その光景は美しかった。
「どうや、きれいやろ。この世の憂さなど全部忘れてしまうやろうが」
振り返りそう言った柚の笑顔は、言葉の通り何の翳りもない晴れやかなものであった。
葉蔵はあらためてこの花を見た。繊細な弧を描く花弁、細く長く伸びた蕊（しべ）……天上に咲くという白い花は、たしかに忌むべきあの赤い花と同じ形をしていた。
「裏手の花はここから持って来たのか」
「父親がな」
ほんのわずかな沈黙のあと、そう答えた柚の表情には、なぜか奇妙な憚りがあった。
「おまえの父親は、薬師か何かか」

重ねて訊ねる。
「いや。父親は病人やった」
今度の答えは早かった。
「病人がこの花に触れて平気やったのか。毒の花やと言うとったやろう」
「……それは」
柚は再び奇妙に表情を歪めて笑うと言い淀んだ。それから気分を変えるようにさっぱりと笑い、
「ええやろ、もう、父親のことは」
と言った。
「……毒は用いようで薬にもなる……」
ひとりごちるように葉蔵が呟いたのを、柚が聞き咎めた。
「何や？　おまえこそ、薬師か何かか」
「さてな。もしそうやったとしても、今のわしでは何の役にも立たんわ。何も覚えてないではな」
今度は葉蔵が笑い、柚の表情がすまなそうに変わった。
「そんな顔をするな。この花畑にはふさわしゅうなかろうが」
そう言うと、柚も笑った。
――毒は用いようで薬にもなる――
柚の子供のような笑顔を見ながら、葉蔵は先のおのれの呟きを胸の中で反芻していた。
あれは誰の言葉だっただろう。自分か、あるいは近しい誰かか。どうしてあの言葉を思い出したのだろう。
自分のことなど、何ひとつ覚えていないはずなのに――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8491t/

紅蓮の鬼ノ参　白い花

2011年7月3日03時38分発行